

子どもヒアリングのまとめ

1 子どもの意見聴取の目的

(仮称) 子ども条例について検討するうえで、子ども本人が現在どのようなことを感じながら暮らしているか聞き取り、参考とするため、子どもに関連する施設・団体を利用する子どもに対して意見聴取を行った。

2 子どもの意見聴取の手法

意見聴取の対象施設・団体は「3 アンケート調査等を活用する対象等」及び「4 子どもヒアリング実施対象等」のとおりであり、既存のアンケート調査等が活用できる場合はその調査結果を参考とした。

また、子どもに関連する施設・団体として、困難な状況にある子ども達が集まる場所を中心に「子どもヒアリング」を実施し、個別の聞き取り調査を行った。

「子どもヒアリング」では、子ども達に対して(仮称)子ども条例の検討のために意見を聞きたいことを説明したうえで協力してもらい、子ども達の個別の悩みごとや考えを聞くために、できるだけ個別に、親しみやすい話し方・表情でヒアリングを行うことを心掛けて実施した。

なお、各対象施設・団体に関わるおとなからのヒアリングも実施している。子どもから直接意見を聞き取ることが困難な場合には、施設・団体に関わるおとなからのヒアリングのみの箇所もある。

3 アンケート調査等を活用する対象等

対象	活用する調査等
幼稚園・保育園	市民まつり「子どもアンケート!」を活用
小学校	教育計画策定のためのアンケート調査を活用
中学校	同上
高等学校	同上
児童養護施設	東京都福祉サービス第三者評価結果を活用

4 子どもヒアリング実施対象等

対象	実施期間	ヒアリング人数等	備考
スキップ教室(適応指導教室)	平成30年2月2日(金)	教育支援課職員及びスキップ教室職員より取組状況、子ども達の状況、課題についてヒアリングを実施	※おとなへのヒアリングのみ
ニコモルーム(不登校ひきこもり相談室)	平成30年2月2日(金)	教育支援課職員より取組状況、子ども達の状況、課題についてヒアリング	※おとなへのヒアリングのみ

		を実施	
児童館・児童センター (ひばりが丘児童センター、保谷柳沢児童館)	平成30年1月23日(火)～ 2月8日(木)	小学生世代 11人 中学生世代 5人 高校生世代 8人	
学童クラブ (東学童クラブ、北原学童クラブ、芝久保学童クラブ)	平成30年1月24日(水)～ 2月8日(木)	小学生世代 18人	
こども日本語教室 (NPO 法人 西東京市多文化共生センター・NIMIC)	平成30年1月18日(木)	小学生世代 3人 中学生世代 5人	
障害のある児童に関連する施設・団体 (市民活動団体「ぶーけ」、「さーくる縁」)	平成30年1月16日(火)、 1月19日(金)	それぞれの団体メンバーより、子どもの目線で子どもヒアリングの質問内容に回答いただいた。	※おとなへのヒアリングのみ
総合型地域スポーツクラブ (ココスポ東伏見)	平成29年12月22日(金)、 平成30年1月19日(金)	小学生世代 14人 中学生世代 2人 高校生世代 5人	
子ども食堂 (放課後キッチン・ごろごろ)	平成29年12月28日(木)	小学生世代 8人 中学生世代 4人 高校生世代 3人	
学習支援団体 (学び塾「猫の足あと」)	平成29年12月21日(木)	小学生世代 7人 中学生世代 4人	
放課後カフェ (青嵐ブックカフェ)	平成29年12月13日(水)	中学生世代 23人	
図書館	平成30年1月19日(金)～ 2月2日(金)	図書館職員より、子どもの目線で子どもヒアリングの質問内容に回答いただいた。	※おとなへのヒアリングのみ
小・中学校PTA	平成30年1月16日(火)	小・中学校PTAの代表者より、子どもの目線で子どもヒアリングの質問内容に回答いただいた。	※おとなへのヒアリングのみ

※ヒアリングの総件数は、(子どもからのヒアリング件数120件) + (対象施設・団体のおとなからの回答(対象数×1=12件)) = 132件である。

5 子どもヒアリングから明らかになったこと

(1) 子ども達の現状について

・最近の子どもの興味・関心・楽しみ

子ども達が夢中になっていること、楽しみにしていることは、対象とした施設・団体に大きな差はなく、スポーツ（部活動含む）、TVゲーム、友人と遊ぶ・話す、読書、テレビが多い。YouTube を見ることと答える子どももいる。また、120人中9人が「なし」と答えている。

その中で悩みを抱えている子どもは1人であるが、自己の能力を伸ばしたいという前向きなものであった。

・子ども達の自己肯定感

自分が好きか。という質問をした際、「好き」、「少し好き」と答えた子どもと、「普通」と答えた子どもが多く、ほぼ同数（40人強ずつ）であった。一方「あまり好きでない」、「好きでない」と答えた子どもは全体で20人、「その他」及び「未回答」と答える子どももいた。

世代別では、小学生世代は全体での傾向と似た結果であり、中学生世代は「好き」、「少し好き」の割合が多く、高校生世代では「普通」の割合が多かった。どの世代でも「あまり好きでない」、「好きでない」の回答は一番少なかった。

「普通」及び「その他」と答えた子どもの理由としては、自分の中で「好きなところ・自信があるところ」と「嫌いなところ・自信がないところ」の両方があるからという回答が多く見られた。

自分が好きかどうかの質問は、自己肯定感をはかる指標となる。自分が好きと答える場合、自分に自信があったり、家族から愛されていたりと、自分の価値や存在意義を肯定できる感情を持っているといえる。

今回のヒアリングでは、自己肯定感が低いと思われる子ども達が全体の約17%おり、「苦手なこと・できないことがある」、「理想の自分になれていない」、「何となく」等の理由であった。理想とのギャップにより自信を持ってない子ども達に、現状の自分を認めてあげること、そのうえで目標を持っていきいきと過ごして欲しいと伝えたい。

(2) 子どもの権利条約について

（仮称）子ども条例は、西東京市の子ども施策をさらに進めていくため、平成28年5月の児童福祉法改正で子どもの権利擁護がその理念として位置付けられたこと等を踏まえて制定を目指している。子ども達のための施策を進めるために、子ども自身及び子どもに関わるおとな達が子どもの権利を知ることは不可欠である。

今回のヒアリングでは、子ども達に子どもの権利条約を知っているか、また、ユニセフが提唱する子どもの権利条約の4つの柱（生存・発達・保護・参加の権利）について聞き取りを行った。

子どもの権利条約についての認知度は、約8割の子ども達が知らないということで、子ども達への普及が必要であることが分かった。ヒアリングの際、子ども達に子どもの権利条約及び4つの柱について説明をすると、真面目に聞き入ってうなずく子ども達が大半であり、

条約について広めてほしいと話す子どももいた。

4つの柱については、生存・発達・保護・参加の権利が全て必要と答える子どもが多かった。個別の権利では、小・中学生世代は「生存」の権利、高校生世代は「保護」、「参加」の権利が必要だと考えている。

また、日本で守られていないと思うものは、という質問には「保護」の権利と答えた子どもが突出していた。これは、児童虐待が現実に行き起きているという理由をあげる子どもが多く、悲惨な事件が起きている状況に悲しみや憤り、危機感を持っている。虐待に関する子ども達の不安を取り除くためにも、取組を進めていくとともにメッセージを発信していくことが大切だと考える。

さらに、子ども達は、「保護」に次いで「参加」の権利が守られていないと考えている。特に中学生・高校生世代で多く、自分達が参加できるものがあまりない、意見が言いやすい環境がない、意見が尊重されずに言い換えられたり、頭ごなしに否定される等の実感を持っている。このことは、子どもの健やかな育ちを考えるうえでも課題である。

(3) 子どもの居場所について

子ども達が最近、一番居心地がいいと思う場所について、対象とした施設・団体ともに多かったのは、家（リビング等）、自分の部屋、布団の中、学校であった。主な理由は以下のとおり。

家（リビング等）	リラックスできる、安心できる、気を遣わない 等
自分の部屋、布団の中	落ち着く、一人になれる 等
学校	友達と話ができる、部活が楽しい、勉強ができる 等

また、図書館と答える子どもも多く、理由は静かだからというものであった。ヒアリングを行った施設・団体についても一定数の子どもが「居心地が良い」と答えており、それぞれが子どもの居場所となっていることが分かった。特に児童館・児童センターでは24人中11人の子どもが、色々な世代の子どもと楽しく遊ぶことができるということで、子ども達の居場所として確立されている。

ヒアリングの中で、少数だが自宅は居心地が悪いと回答する子どももいた。必ずしも自宅が落ち着く場というわけではない。安心できる、楽しく遊び・学ぶことができる、心の拠り所となるような場を様々な選択肢から選ぶことができる環境や情報の発信は必要なことだと考える。

(4) 子どもの不安、悩み及び相談について

- ・普段、子どもが感じている心配ごと、悩みごと

ヒアリングでは約4割の子ども達が、心配ごと、悩みごとが「ある」と答えている。世代別にみても、小学生世代は約2割、中学生世代は約5割、高校生世代は約6割となり、年齢が上がるにつれて、心配ごと・悩みごとを持つようである。中学生・高校生世代では、勉強や受験・進路についての悩みが大半であり、次いで部活に関する悩みが多い。

留意すべきは、少数ではあるが、子ども同士での名前や呼ばれ方や悪口・暴力等があると

の「いじめ」に係る悩みで、先生や親に相談しているという意見があった。

また、家庭において、家族との関係が上手くいっていないという悩みもあり、親が忙しいために遠慮して自分の体調不良を伝えられない、親が病気であるため家事を一手に引き受けている等の状況にある子ども達もいる。その子ども達の場合、悩みがあった際に相談できる相手として、友人やスクールカウンセラーをあげたが、誰にも相談できず自分の中に抱え込んでしまうと答える子どももいる。

いずれの場合も、子ども達が心配ごと、悩みごとを相談でき、安心して過ごせるような仕組みづくりは必要と考える。

・他人との違いを感じ悩む子ども

他人と違うと感じることがあり、かつ、そのことで悩みを持っている子どもについては、全体の約2割であった。世代別にみると、小学生世代は約1.5割、中学生世代は約3割、高校生世代は約3割となり、中学生・高校生の約3割は他人との違いを感じて悩んでいる。内容は世代に関わらず、自分と他人の考え方の違い・性格についての悩みが突出している。また、身長や体型等の身体的なこと、他人と比べて勉強や運動ができないこと等があげられた。

考え方の違いを感じ、一般的なものの見方が分かるということもあるが、個性を抑え込んでしまうのではなく、一人ひとりの意見がお互いに尊重されるべきことを子ども達に伝えていくことが必要であると感じた。

・子ども達の悩みへの対応と相談先

悩みがあった場合には、誰かに相談する、体を動かしたり、歌を歌ったりして発散する、なるべく自分で考える等の対応をとることが多い。また、相談する場合の相手については、友人と答える子どもが多く、次いで母親が多いというものであった。その他、家族、学校や学童クラブの先生、児童館・児童センターの職員と答える子どももおり、スクールカウンセラーに相談するという子どももいた。

深刻なのは、悩みを抱え込み我慢をする子どもがいるということである。この場合、相談できる相手がいない場合が多い。また、身近な人に打ち明けられない悩みがあるということでもある。このことは、身近な人達や様々な相談窓口があるにも関わらず、どこにもつながらない状況があるということである。どんな悩みでも子ども達に寄り添い、安心して話を聞いてもらえ、不安を取り除いてもらえる仕組みづくりは喫緊の課題である。

(5) 子どもの意見表明・参加について

・子ども達が言いたいこと・伝えたいこと

ヒアリングをした子ども達の約半数は、誰かに何か言いたいことがある。その内訳は、小・中学生世代はともに4割強、高校生世代は約7割である。内容は、友達や家族、ヒアリング対象施設・団体の方等に感謝を伝えたいというものや学校への不満・要望についてのものが多い。また、平和で安全に過ごしたいという思いが読み取れる回答もあった。

さらに、いじめに関連するものと思われる回答も複数あり、相手の気持ちを考えてほしい

等といった切実な思いを持つ子どももいる。その他、誰かにそばにいてほしい、悩みや怖いことが消え去ってほしいと言いたいという、寂しさや不安を抱える子ども達の声もある。

子ども達が普段言えずに抱えている思いについて、率直に話せる場や仕組み、また、子どもや子どもに関わるおとなが向き合って意見・話を聞くことができる意識が醸成されることが望まれる。

(6) 西東京市について

・西東京市の好き・好きでない理由

ヒアリングを行った子ども達の約7割が西東京市を好きと答えており、その主な理由は、自然・公園が多い、住みなれた安心感がある、都会過ぎず田舎過ぎない、地域にあいさつをしてくれる人達がいる等であった。自然が豊かで、住みやすく、人とのふれ合いがある町が子ども達の安心した暮らしにつながっていると感じる。

また、少数だが、西東京市を好きでないと答えた子ども達もいる。理由は、貧困、いじめをなくしてほしい等をあげており、この子ども達の半数は自己肯定感が低く、悩みを持っている。

・西東京市がさらに良くなるように子ども達が考えること

子ども達が思う西東京市をさらに良くしていく方法として、ショッピングモールや遊園地等の人の集まる施設・人気のある店をつくるという意見が多かった。類似のものに既存の施設等を有名にするという意見もあった。また、道路や施設等の清掃を行う、緑・公園を増やす等といった環境に関わる意見も同様に多かった。公園については、ボール遊びができるようにしてほしいという意見も複数あった。

次いで、このままでよいと答える子ども達もいた。

気を付けるべきは、いじめをなくすことという意見が複数あったことである。いじめについては、ヒアリングの中で心配ごと・悩みごと、言いたいこと、市を好きでない理由等に散見されており、子どもをめぐる大きな課題であるといえる。

その他、市内が生活の中心である子ども達の意見は、地域課題を捉えたものであったり、市が発展する可能性を含んでおり、改めて、子どもの意見を聞くことの大切さに気付くことができた。

(7) 困難な状況にある子ども達への支援

・いじめ、虐待、貧困に関する不安・悩みを持つ子ども

ヒアリングを通して、いじめ、虐待、貧困に関する不安や悩みを口にする子ども達がいることが分かった。自分の経験や、自身がその状態ではないが、身近で見たり、聞いたり、あるいはテレビ等を通して知ることにより、不安を感じている。

子ども達が健やかに育っていくためにも、行政や子どもに関わるおとながこれらの課題に取り組んでいることをメッセージとして伝え、不安を取り除いていく必要があると考える。

(8) 特別なニーズのある子ども達への支援

・日本語を母語としない子ども達

日本語を母語としない子ども達については、日本に来る前はできていた勉強が、日本語が分からないためについていけなくなることがあり、高校受験に対し強い不安を感じる子どももいる。また、保護者も日本語が分からない場合、学校からのお知らせが理解できず流れてしまうこともある。これらについて、支援団体の話やフォローにより、受験に積極的になり学習意欲が高まったり、お知らせ内容の通訳等により安心感が得られている状況にある。

出生や外見から学校でからかいを受けるという話もあったが、子どもからのヒアリングでは受験・勉強・部活に関する悩みごとが数件で、自己肯定感が高い傾向にある。

とはいえ、日本語を母語としない子ども、外国にルーツを持つ子ども達について、安心して生活できるように見守っていくことが必要である。

・障害のある子ども達

障害の程度によって状況は様々であるが、それぞれに楽しみにしていることがあり、家族から愛されていること、自分に自信を持っていることで自己肯定感も高い傾向にあると考えられる。自己への関心を向けてほしい、話を聞いてほしいという思いを持っていると共に、習いごとや施設利用についての制限等があり、子どもの意見表明や参加する機会について真摯に考えていくことが必要である。

・不登校・ひきこもりの子ども達

不登校・ひきこもりの状態にある子ども達については、様々な事情を有しているが、生活リズムがつくられていない子ども達が多い。そのような子ども達は、家庭の基盤が揺らいでいる場合が多く、自分が好きかどうか判断する基準や感覚を持っていないと考えられる。これらは、他者との関わりの中で育つものであり、ほめられる・叱られるといった自分にきちんと向き合ってくれるおとな・親の力が必要であると考えられる。

行政や子どもに関わるおとなは、親が子ども達に向き合い、子育てしていけるように支援をしていくことが大切である。